

氏名	大小田 万侑子
ヨミガナ	オオコダ マユコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第670号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 物語性と藍の型染による生命感の表現について 〈作品〉 はじまりのうた 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	上原 利丸
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	青柳 路子
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	橋本 圭也
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	藤原 信幸
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）

（論文内容の要旨）

筆者は型染と藍抜染の技法による制作を行ってきた。型染は日本の伝統的な染色技法であり、その模様は型紙を刃物が彫り抜いたことによる鋭利で繊細な線の特徴を持つ。藍抜染は19世紀に開発された近代的な技法である。藍染した布に抜染剤を塗布し乾燥させ水で洗うと、抜染剤を置いた箇所の藍が白く抜けることで模様が染められる。以下より型染の呼称を型紙と糊の使用を前提とし、藍抜染を利用した型染を「藍の型染」と呼ぶ。

これまで藍の型染を用いて自作品において表現しようとしてきたのは、人や動植物、自然現象、架空の生きもの等の生命感である。この生命感は、筆者の芸術表現の根幹にある物語性による躍動感のある線が、藍の型染の模様として染色されることで生まれる。「物語性」とは、古くから語られてきた神話や昔話、伝説等、幼年期より触れてきたお話の世界が根底にあり、多くは絵本体験で培われた感性である。

藍の型染による制作のきっかけは偶然的であったが、現在も追求し続けている。生命感の表現を目指すにあたり、なぜ藍抜染に拘り絵画的な描写を型染で染めるのか改めて捉え直すことが、今後の作品制作の深層と広がり追求に必要である。

本論文では、「物語性」と「藍の型染」に焦点を当て、筆者がこれまで行ってきた制作の実践を踏まえ、その特性を考察し、自身の目指す生命感の表現について明らかにすることを研究目的とした。

第1章では、創作の根源である物語性について述べた。筆者の藍の型染作品は、幼年期の絵本体験がきっかけとなり展開している。沢山の絵本により影響を受けた幼年期の《お絵描き》の描写と、子ども時代の「絵を描くこと」について振り返り、現在の自作品に至る創作の原点を確認した。その上で学童期に読んだ漫画から関心を持った『古事記』を始め、様々な神話や伝承の物語が、筆者のまなざしを通して自作品の上で構成され、創造の物語として表現されることを明らかにした。自作品の模様は白抜きであり模様の箇所ほぼ全てに陰影が付かないことから、その表現に細かな線を多用する。このことから、「デフォルメ」や「集合と緩急」を伴った線が筆者の物語性を通して躍動感を持ち、藍の型染を経て生命感のある模様が形づくられるとした。そして、他作品に感じる躍動感のある線について自作品と比較しながら考察

を述べた。

第2章では、藍の型染から生まれる線の表現について論じた。型染の制作工程の中で筆者が特に重点を置く型彫に着目し、下絵・型彫・染色における筆者の制作経験を基にその考察を述べた。続いて、藍の型染の追求に至った経緯から技法の特性を再考し、防染と抜染の模様の比較を行うことで、技法選択の意義を述べた。これにより、生命感のある模様の形成には型彫と抜染に対する筆者の創造的な感覚が必要であると、他の作家の藍抜染の使用について比較・分析を行うことで、考察を深めた。次に藍染による青色に焦点を当て、藍染料の概要から青の世界的な認識と古代日本人の色彩感覚について触れた上で、古代日本人の持っていた「あお」の意味から藍色の色相を表す「縹」に着目し論じた。この考察より、藍の青から「定まっていない」意味を見出し、その性質を述べた。更に古代日本人の「しろ」に着目し、自作品上の白い模様の捉え方を藍抜染の工程と共に詳述した。これにより、藍は白という神秘的で怪異的なものを出現させる、青の空間としての自然的な意味を持つという論から、自作品上での青と白の関係を明らかにした。この上で藍の型染が筆者の祈りの行為であり、生命感のある表現がその表れであることを述べた。最後に、青と白の関係に意識を向け制作した自作品について紹介し、藍の型染と生命感の関連性を詳らかにした。

第3章では、博士審査展提出作品に向けて行った、抜染糊の化学的効果を利用した実験について取り上げた。そこで博士課程を通して行ってきた藍抜染と自作品で掲げる主題との関わりについて考察した。第一に、生地裏面を通して表面に色が出現する透過性を利用した実験を行い、参考作品と共に紹介した。次に、白のバリエーションを自由に扱うため、抜染糊の材料と配合を変えて白抜き具合の調整を図り、提出作品への技術的な土台を見出した。

第4章では、博士審査展提出作品について述べた。生命感の表現を包括した提出作品のイメージの深層を詳述し、第3章で述べた抜染糊の新たな表現のため行った実験を基に、その技術的な展開を明確にした。次に提出作品の制作工程を図と共に解説し、考察を述べた。

以上より、物語性と藍の型染による生命感の表現は、筆者の自然への憧憬や神仏への畏敬の念の表れで、その制作行為を祈りの形とした。祈りとは、自然に生かされていることへの感謝であり、作品制作はその感謝と同時に、いのちの歓びを真に受けることのできる行為である。最後に今後の展望を述べ、本論文のまとめとした。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、型染と藍抜染の技法を用いて、『古事記』に登場する神々や伝承の物語などをモチーフとした独自の世界を表現してきた申請者が、制作における主題として追究してきた生命感の表現とは何かを明らかにしようとしたものである。その研究は、用いる染色技法の特徴やその工程に基づいて、自らの制作を詳細にとらえ論じたものだが、他の染色技法や他の染色家による表現との比較検討はもちろん、美術における他の表現技法や作家作品にも視野を広げて検討し、考察を深めようとしていることに特色がある。

本論文は、主に次の3点のオリジナリティを有するものとして高く評価される。

第1に、申請者の作品から感じ取ることができる「物語性」は、単に作品上に表現された世界によるものではなく、申請者自身が自然や生き物から得た体感を基盤に、モチーフを生き生きとした、かたちあるものとして生み出していくプロセスに根ざすものであること、なおかつ、それを幼少期の制作体験から掘り起こして自らの創作の根源として示したことである。

第2に、型染によって生命感を表現するには、型彫りで生まれる線が重要であるとした上で、その表現のために必要とされる線の性質について分析し考察したことである。これは、作品のほぼすべてに陰影がつかない表現技法を用いる申請者にとって、どのように線で表現するか、その線によって最終的に藍色と白色からなる染色作品として表現するかを力強く論じるものにもなった。

第3に、素材の布が藍に染まり、抜染によって白色が生まれるという藍抜染の工程における色の変化に注目して、日本の色彩の成立に基づきながらそれぞれの色について考察し、特に抜染で藍色から白色が生まれる変化は、古代日本の色彩の意味によれば、生命あるものが出現する過程ととらえることができると論じたことである。

これらに加えて行われた、藍抜染で用いる抜染糊の技法材料についての実験研究は、用いてきた技法や材料による限界を超え、生命感の表現をさらに展開させようとするものとして評価できる。こうした総合的な研究によって、申請者が目指す生命感の表現についての結論を導き出し、研究の成果は博士提出作品に結実した。

以上のオリジナリティと研究の成果が示された本論文は、課程博士論文の水準に十分に達していると審査委員会全員一致で判定した。

(作品審査結果の要旨)

型染の技法は、鎌倉時代末頃に完成した染色方法で、基本的には自由な形に彫られた型を用い、糯米と小紋糠を主剤とする糊を色素(染料)の浸透を防ぐ防染剤として布に置き染色後に糊を洗い流す方法と直接に染料や顔料を刷り込むことで色を着ける方法がある。大小田万侑子氏の作品は、これらの中間的な存在の技法であり、その特徴は先に藍で浸染した生地を前者の方法の応用により防染糊ではなく抜染糊を用いる色を抜く表現方法で、糊を置いてから染色する方法よりも糊が染液で垂れることがないために染色部分が斑無く仕上がる利点がある。

提出作品《はじまりのうた》の色相は藍染での表現を基調とした8枚組みのタペストリーで仕上げられており、画面の中心に向かうにつれ濃色に変化させることで、均一な抜染による白色とのコントラストを強めると同時に中心の幹の存在感をより一層強調させる効果が見られる大作である。全体の構成は、生命の巨樹を中心にして周りで息づく生き物たちのそれぞれの物語を描いてあり、シーンの流れによってストーリーがあるわけではないが、鑑賞者のそれぞれの物語性をも掻き立てられる興味深い展開が見られる。ただ、作品画面の大きさにも関係するが、白の密度差による色の幅が乏しく見えてしまう点が惜しい。作品中のモチーフは、躍動感・デフォルメ・集合・緩急が随所に見られ、特に大小田氏が描くオリジナルのモチーフは、可愛らしさと不気味さが両立するような不思議な雰囲気があり味わい深い。

「藍染の色彩・型彫りによる線・物語性・テーマ性・使用しているモチーフ」について全て生き物や生命感というキーワードで繋がり統一感があり、論文の内容との整合性も認められる。

論文第3章にある研究において表現の独自性に繋がる内容が、生地を表裏両面からの抜染や抜染糊の材料や配合調整であるが、本作品には表現として見られない。これから研究を続け効果的に表現に結びつけられるような取り組みに期待する。

以上の内容から、審査委員会全員一致で博士作品の水準に十分達していると判定した。

(総合審査結果の要旨)

大小田万侑子氏の制作研究の根源には、幼少期の母親からの絵本の読み聞かせがある。それは、本人にとって心身に染み込んだ情念的要素を含んだ創作につながる宝物である。絵本の物語は個人の人為的なものであるが、それぞれに歴史や自然、そして生物など様々な背景を持っている。母親が子供に物語を音韻豊かに読み聞かせる時、ストーリーから得られる客観的な情景のみならず、身体にも五感を通して高揚感を伴って入り込んでくる。特に母親の研究対象であった日本古代の書「古事記」から受けた影響は見逃せない。それは氏が作品において表現しようとしてきた人や動植物、自然現象、架空の生き物等の生命感にも深く関与している。

幼少期における読み聞かせを通じた「お絵描き」、成長期からの漫画による「創作による物語絵」の変

化の中で一貫して培われてきたものは、作品を構想し創作する上で物語における時間軸「はじめとおわり」を重視することである。一場面の表現ではなく様々な自然、生き物等の構成要素が大画面の中で「物語性」を有していることである。

一方で藍抜染は19世紀に開発された比較的新しい染色技法である。糊防染による型紙を使用し、藍抜染を利用した「藍の型染」と「物語性」による生命感ある表現はどのようにして可能なのか。型紙を切る（彫る）行為から生まれる線は、氏の制作にとって最も重要な要素である。「デフォルメ」、「集合と緩急」を伴った線は、模様となった時に躍動感や生命感を表現できるのか。型紙を切る行為は直接的であるが、糊を置くことで間接的な表現に変換される。モチーフの形状を下絵の段階で精査するのではなく、本人のイメージに任せて切ることで解決を試みている。手法としては木版の棟方志功の制作との共通性を感じる。装飾的ではあるが躍動感や生命感を伴った表現の例として、先行考証の中で述べている東洋、西洋における更紗、ピアズリー等の線の特徴など、一つの解決方法として納得できるものである。

藍色の色相を表す「縹」の青の「定まっていない」意味合いと古代日本人の「しろ」に対する色彩感覚の考察から藍は白という神秘的で怪異的なものを出現させることを提示し、「藍の型染」によって生命感ある表現が可能であることが述べられている。藍抜染による内外の作家の表現と技法を検証することで、その相違と「藍の型染」における独自性を示し、さらに技法の新規性と作品の表現を高める為「藍抜染の透過性」実験を重ねている。現段階では博士展の作品に導入するまでには至っていないが、今後さらに研究を深化させ論文化することで普遍性を有し、社会に還元できる内容となることを期待する。

博士展提出作品「はじまりのうた」は藍抜染の糊の実験が生かされていないが、大画面の中に氏の自然への憧憬や神仏への畏敬の念を表現したもので独自の「物語性」と「藍の型染」による生命感が感じられる秀作となっている。

以上のことから審査委員会全員一致で「博士（美術）」の学位の水準に十分に達している博士論文と作品であると判定した。